

### 十三章 さらばイタリア

イタリアを去る準備のひとつは車の処分である。夫の会社の規定では、1台は持って帰ってもいい、ということだったらしいが、あんな大きい車は日本のわが家の車庫には入らない。左ハンドルも不便である。金銭的には損でも売れない。が、これが大事（おおごと）だった。

日本では想像がつくまい。中古車店に持って行きさえすればいいのだから。が、イタリアでそうすると、誰かがそれを買うまで、中古車店は代金をくれない。預かるだけなのだ。トルコ人のフリヤなど帰国して半年になるのに、まだ車が売れていないという噂だった。売れたら、代金を取りにわざわざイスタンブールからミラノまで来るのである。冗談ではない。

買い手が見つからないときはどうするのか。アメリカ人のロクサーンは最後の最後まで買い手が見つからず、とうとう明日は飛行機に乗る、という日にまでイタリア人の友人とその車に乗ってあちこち売りこみに行き、教会に行ったら神父がもらってやってもいいと言ってくれた。やれやれとホッとしたが、神父はタダという条件なら、と頑固にゆずらないので、所有者を変える手続きの費用までこっちが払うハメになった、という悪夢のような話を聞いている。

中古車情報誌を買い、5人乗りのフォードと7人乗りのフィアットの型式と生産年から相場を見て、少し低めに値段を設定し、「売ります」という広告を国際クラブと日本人会の月報に出す。さらに3色のマジックインキで10数枚のビラを書いて近所の店に貼らせてもらう。

が、買いたいという人間は現れない。

たまに来て、ざっと話を聞いて車を見て、それっきり。ひとりだけフィアットにかなり興味を示したアルゼンチン人の銀行員は、何度も来ては型が古い、ABS ブレーキがついていない、と値切り、フィアットは電気系統が弱いのが通説だが今まで故障はなかったか、と聞いてまた値切り、挙句（あげく）にわたしの行きつけの修理業者に連れて行かせ、修理が必要な箇所までちゃんと聞き

出し、さらに値切った。たいした商売人である。結局、希望値段の半分以下になった。

わたしはがっくりし、泣きたくなり、頭にきたが、別の買い手は現れない。日本に帰る日は迫り、わたしの愚痴を聞き続けて胃が痛くなりかけた亭主殿は「もういいよ、廃車にしよう！」と叫ぶ。それではこっちが料金を払わなければいけないし、やり方を知らない廃車手続きをイタリア語で調べて書類をイタリア語で書き、知らないところへ地図を見て行くのは亭主ではなく、わたしである。こっちのほうがよっぽどめんどくさい。

「わたしが必死で交渉して売れそうなのに、何もしてないあんたが余計なことを言わんといてちょうだいっ！」と怒鳴り返し、今度は中古情報専門新聞に広告を出す。が、申しこんでから掲載まで1週間ほどかかると言われた。交渉を考えると引っ越しに間に合いそうにない。

誰も見に来なかった、古いが故障の少ないフォードはとうとう捨て値の5万円で、息子のサッカー友だちのお母さんのグラッツィエラに売った。15万円は欲しかったのだが、彼女が母子家庭で清掃の仕事をして息子を育てているのは知っているし、今までずいぶんわたしに親切にしてくれた。ま、いい。廃車よりはるかにマシだ。免許取りたての彼女はわたしに抱きついて喜んだ。

フィアットはやむなくアルゼンチン人に20万円で売った。5年前に買ったときは150万円したのに。頭にきていたわたしは体力がないせいもあって泥汚れを洗いもしなかったのだが、引っ越しのドタバタのさなか、怒り狂った彼から電話がかかってきた。車を洗ったらひっかき傷が出てきたというのである。

あらあら、それはお気の毒様。でもわたしの知る限り傷はなかった。もう取引はすんだ。残念でした！

続いて電気製品。日本で100ワット、アメリカで110ワットの電圧が、ヨーロッパ大陸のイタリアでは200ワットである。日本製品、たとえばこの「ミラノで乳がん切りました」を最初に書いたころに使っていた700ワットのプリンターは、日本語で印刷して家族や知人に送るのにどうしても必要だったので、

1万円ほど出して変圧器を買って電圧を下げて使った。が、反対に200ワット用のイタリア製品は、100ワットの日本では使えない。まるでダメということはないらしいが、変圧器がえらく高くつく。だから帰国する日本人やアメリカ人は、イタリアで新しく買ったほとんどすべての電気製品を売り払ってしまう。

これも国際クラブ、日本人会の月報双方に「売ります」の広告を出した。日本人会のほうは、実は締切が過ぎていたのだとあとで知った。今までのつきあいから特別な好意で会報とは別刷りの広告を出してくれたのだった。

そのとたん、「買います」の電話が猛烈な勢いでかかってきた。わたしのつけた値段が破格の安さだったためらしい。以前、帰国になりかけたときの「売ります」の広告に夏休み中でほとんど反応がなかったので、今回は恐れをなして安くしていたのだ。スチームなしのスイス製アイロンなんてたったの500円である。そしてフロア電気スタンド、天井灯、卓上スタンド、テレビ、韓国製の1升炊きの炊飯器、ミキサー、掃除機、電子レンジ、トースター、ラジカセ、扇風機、変圧器数台……。

が、売る約束はしても、炊飯器などは引っ越しギリギリまで使いたい。結局、荷造りで忙しいまただ中に、お人好しのわたし自身がかなりの品物を車で配達するはめになった。

引っ越し業者はどこでもよかったのだが、会社の指定があった。最初の打ち合わせに来たのは、日本企業なのに中国人だった。日本への留学経験があるとかで、日本語は達者。実によくしゃべった。日本人で仕事の話に来てここまでしゃべり続けるのはそうはいまい。

肌の黄色い東アジア人はミラノのあちこちで見るが、日本人かどうかはたいていわかる。まず、日本人は姿勢が悪い。そして、わたしと目が合うならば、日本人だと、しゃべらなくてもなんとなく、「あ、日本人ですよ」という親近感のオーラを互いに出していることが多い。そして、狭いところですれ違おうと、かすかに会釈したり相手に道をゆずったりと遠慮を示す。これが中国人や韓国人などの他の東アジア人だと、遠慮感ゼロ。極端に言うとなんか「わたしが通るんだ

からあんたよけなさい」みたいな強気である。欧米人も基本的に強気タイプだが、相手が自分のために道をゆずってくれたとわかると、小声で「ありがとう」と言うことが珍しくない。わたしも「いいえ」と返事する。日本人だとすみません、と下手から詫びを言うのに欧米人は対等に感謝を口にする。わたしはこの感謝のほうが好きだ。

で、日本人以外の東アジア人はすみませんもアリガトウも言わない。むしろ、ひよっとしたら赤の他人に道をゆずられることを意外に思っているのではなからうか、という感じさえする。さすがに中国人と韓国人との区別はわたしにはつかないが、どちらも日本の隣国なのに日本とは違うことが多く、文化や暮らしぶり、人情について知らないことも多い。好奇心に満ちたわたしのなかでは、もっと知りたい領域だった。

今までわたしの中国人の知り合いは、ここミラノでひとりしかいない。イタリア語学校で知り合った、ホア（華）という名の女子ソフトボールのプロ選手である。プロスポーツ選手！ しかも異国で！

わたしはよく、あんたもまあ妙な知り合いが多いわね、と言われるが、こんなおもしろそうなのがいたら、ね、今度一緒にお昼食べない？ と誘っているいろ聞いてみたいというものではないか!? ホアはいいわよ、とニッコリ笑ってOKした。

ピザをつつきながら中国人と日本人とがイタリア語でしゃべってるというのも妙な風景だが、これもイタリアでの暮らしならではだ。彼女は中国にいたころに大阪のチームとミラノのチームのふたつからスカウトされ、イタリアを選んだ。

理由は？ とわたしが興味津々（しんしん）で尋ねると、ホアは日本人のわたしに気兼ねして少しためらいながら、日本のチームだと、選手個人の自主性を大切にするとか、自由で個人を大切にする（欧米風の）ムードがないところがどうもね、と説明した。

これを聞いて、わたしはいつだったか国際クラブのメンバーのスウェーデン人で、卓球のナショナルチームにいたという女性が言っていたことを思い出し

た。

「国際試合で日本のチームを見ていると、いわば軍隊調なのよ。コーチの『命令』に選手は直立不動で『ハイッ』、『ハイッ』とだけ答えて、きつい機械的な練習にも無駄口たたかず全面服従してる。緊張感といえばそうかもしれないんだけど、わたしたちだとリラックスしてしかも集中しているのがいいなんて感じがあるのに、そんな雰囲気はまるでない。あれには強烈な違和感があったわ」

中国人とスウェーデン人が日本チームに同じ印象を抱くところがおもしろい。

ホアはイタリアチームに入ったものの、給料はいったん中国政府に支払われたあとで選手個人に送られるという生活だった。そのほかにもいろいろと自由にならない生活に嫌気がさしたので、性根を据えてイタリアに帰化し、チームを替わった。イタリア人コーチとも結婚し、シドニーオリンピックにもイタリア代表で出ている。

そこまで身の上話を聞いたあとで、わたしはホアに、ミラノの中華料理店はけっこう繁盛しているように見えるのに、どうしてスキー場や観光地で中国人を見ないんだろう？ と以前からの疑問をぶつけてみた。わたしは昔から国際的な文化比較に少々興味があって、自国以外で暮らす外国人についても、どこで見かけるか見かけないか、という行動パターンによってある程度、背後の思考パターンを推測することができると考えていた。

「中国人は遊んでお金を使うようなことしないの。お金稼いだら、週末はマージャンやってもっとお金稼ぐのよ。料理店の2階の狭い部屋で何人も一緒に暮らして、また中国から親戚や知り合いを呼び寄せてね、ひたすら稼ぐのよ」とホアは言う。

中国人が利にさとく、積極的に海外に進出しているのは昔から有名だが、今も変わっていないらしい。

引っ越しの打ち合わせに来た中国人にも、この際かねてからの疑問を晴らす

ことにした。

「ね、ミラノの中華街にいる中国人、みんな合法？ 蛇頭（じゃとう）とかいう中国マフィアが密入国させてるとか聞くけど、あのひとたち滞在許可持っているの？」

ああ、あれね、と彼はニヤリと笑った。

「外国人がここで滞在許可とるのに、ミラノ市警察の窓口で並ぶでしょ。中国人たいてい書類そろってないね。窓口のひと、『ほら、これとこれと、この書類要るのに、おまえ、この書類しか持っていない、こっちとこっち用意して来なさい』って言うね。中国人、『はいはい』って頭下げる。で、また同じ窓口の行列の一番最後にそのまんま並ぶのよ」

「え？ 書類ないのに？」

「そう。絶対同じ係のひとのどこね。これ大事。順番来ると、係のひと、『おまえ、さっき来たよね』って中国人の顔見て変な顔して、『さっき言ったでしょ、これとこれ必要ね』って言う。中国人、『はいはい』って言うね。で、また、同じ係のひとの行列の一番最後に並ぶのよ」

「え？ また？」

「そう。今度は係のひと怒るね。『さっき言ったでしょ！ どうしてまた来るの！ これと、この、書類、要るの、わかった！』 怒鳴るのに、中国人、『はいはい』って頭下げるね。で、もう一度並ぶ」

「えっ、まだやるの？」

「そう。今度は係のひと顔真っ赤にして怒るね。中国人、『はいはい』ね。もう一度並ぶと、係のひと、ぶち切れるね。『おまえ、いいかげんにしろ！ もう、おまえの顔見たくない！』 で、スタンプ押してくれる」

「嘘……」

「ほんと。中国人の勝ちね。これで合法」

なんとずうずうしく、そしてたくましいことか。今のひ弱で恥をかきたがらない日本人にはとてもできまい、とあきれ、かつ感心して、帰ってきた夫にこ

の話をする、彼もひと笑いしたあとで、

「いいかげんなイタリア人の役人と、ずうずうしい中国人の申請、っていう組み合わせでないと、ありえないよね。きちんとした日本人の役人相手じゃ絶対通用しない」

確かに。

外国人が滞在許可を得るための窓口は、この当時いつも混んでいた。2、3時間の行列はザラで、申請後に許可証を受け取る時には赤ん坊でも家族全員そろっている必要がある、子どもの退屈をしのぐおもちゃや多少の飲食物など用意して、かなりの覚悟で行かないといけない。もう少し前からいる日本人は、建物の中に行列が入りきらず、寒風吹きすさぶ中で半日並んだこともある、と言っていた。

並び方にもお国柄が出て、「アラブ人と中国人は行儀が悪い。特に中国人はわかってんのかわかってないのか、わかっててわかってないフリしてんのか、何気なく列の割り込みしてくるのが頭に来る」とは別の日本人の言である。

イギリス人も滞在許可の取得では同様に苦労していて、「だいたい、窓口に来てから、これとこの書類が要るのにおまえはこれがないって言うじゃない？ どうしてその一覧表を用意しといて配らないのよ。時間の無駄よね。そんな簡単なことができないなんて、イタリア人は外国人が嫌いなのよ」とクソ味噌にけなす。

まったく、イタリアの芸術と工芸品は世界第一級なのだが、行政的管理はお世辞にも先進国とは言い難い。

ヨーロッパ共通の小話（こぼなし）によると、「フランス人が料理人、イギリス人が警官、ドイツ人が技術者、スイス人が政治家、イタリア人が愛人、という組み合わせが最高。反対に最低なのはイギリス人が料理人、スイス人が警官、フランス人が技術者、イタリア人が政治家、ドイツ人が愛人」である。

完璧なひとも、完璧な国もないさ、と夫は言う。

日本への帰国前に、わたしたちはママ友と「夕食配達サービス」をしてくれ

た国際クラブのメンバー、計 20 人のための立食パーティを開いた。招待しても来れなかったひともけっこうあったが、イタリア人、イギリス人、スウェーデン人、フランス人、ドイツ人、アメリカ人、アルゼンチン人、ロシア人が来た。

スウェーデン人が教えてくれた「ヤンセン（英語ではジョンソン）の誘惑」という、じゃが芋と油漬けアンチョビ（片口いわし）と生クリームだけでつくる簡単で美味しいグラタンや、日本風のほうれん草のおひたし、例によって握り寿司、鶏のから揚げ、フランス人が教えてくれたカスタード焼きなどを作るには、買出しから 3 日かかった。イギリス人から教わったローストビーフのつくり方を応用した、にんにくやハーブをまぶして赤ワインに漬けたまま焼くというローストポークも考えたのだが、オープン料理がふたつとなると、出すときにどちらかは冷えてしまっているし、日本の料理も食べさせたかったので、和風（中華風？）の鶏のから揚げにしたのだった。和洋中ごちゃ混ぜである。

が、料理をがんばったわりには、今ひとつ盛会でなく、客はひととおりに食べ、飲み、話すと長居をせず次々と帰って行った。学んだのはまず客の選択が大切、ということである。わたしは最後の恩返しのつもりで呼んだので、国際クラブの友だちと子どもの学校友だちの親（ママ友）というふたつのグループに分かれてしまい、しかも 2 歳違いの子ども 4 人の親となるとママ友どうしは知り合いでなく、この場が初対面というひとたちが何組もあった。これではもてなし役がかなり積極的に会話をつなげなければ、盛り上がらないのは当然である。

今までわたしは 1 家族や 2、3 人の友人を呼んだことがあったし、スウェーデン人やイギリス人、イタリア人の食事会やパーティに呼ばれた場合は、多少人見知りをする夫はともかく、わたしは初対面でも会話をしかけたり笑わせたりして、気詰まりなことはあまりなかった。子どもの誕生日パーティを家でやったときも、こちらの習慣に従って小 2 の 1 クラス全員に招待状を出したら、15 人の子どもと 15 人の親、さらにばあ様（祖母）と犬までついてきたときには目をパチクリしたが、てんやわんやでも家中子どもたちは遊び歩き、親たちとはおしゃべりして楽しかった。が、大人ばかりの大人数のパーティの主催者となるには、わたしは少々経験不足だったようである。



そういえば、昔トルストイの『アンナ・カレーニナ』を読んだときだったと思うが、帝政ロシアの時代に貴族が何人か自宅に呼んで食事会をする際に、もてなす側が、あのひととあのひとはよく口論を始めるから、座席は少し離しておいて、隣にそれぞれ仲介役になりそうなひとを配置しなくては、とか、座が盛り上がらないときのためにこの話題を用意しておけば安心、とかいう一節があった。つまり、ひとを招く際にはごちそうを出すことと客を選ぶことだけでなく、楽しい会話のお膳立ても必要なのだ。それをわたしが学習したのがイタリアを去る直前というのは、少し残念だった。

引っ越しには持ち物の整理と家の掃除がつきものである。しかし、このふたつはわたしがとことん嫌いで、とことん苦手な分野でもある。6年半前アメリカから日本に帰るときにも、整理のできていない荷物に引っ越し業者は怒るし、当時8歳、6歳、4歳、2歳の子と猫が汚し、傷めた家と家具の修理代は莫大なものだったらしい。が、家賃関係は会社持ち、という契約だったので会社が全部文句ひとつ言わず払ってくれた。これは欧米の会社のいいところで、契約は絶対である。

今回はこの契約どおりが裏目に出た。夫はイタリアに来る前、日本の会社を一度退職し、イタリアの会社の現地雇用になっていた。給料そのものには海外赴任手当に当たるものがあったので、なんとか郊外の一戸建てにも住めたとし、4人の子を私立のインターナショナルスクールに通わせることもできたのだが、借家契約の中には、イタリアを去るときにもらう退職金の中から、家の修理費を払うべし、という一項があった。

イタリアの大家は、外国人のあいだで評判が悪い。「ぼる」のである。借家人に責任のない、ガスボイラーが動かなくなったとか、ドアが壊れた、というような家の修理費を出さないとか、退去にあたって余計な金を払わされた、とかいう話をいくつも聞いている。

わたしは樂觀視していた。わたしたちの大家は奥さんがドイツ人だったせいとか、今まで雨漏り、生垣の刈り込み、水道の修理などを全部大家指定の業者に

させ、文句ひとつ言わず払ってくれていたのである。

が、退去の際の立会いに来ないと言った。

クリスマスという理由で。

ここで灯った黄信号に、わたしたちは気づいているべきだったのだ。

わたしたちは掃除がきれいにできなかった。4人の子と猫が汚すのを、借家だからとふだんから気を使ってきれいにしていればよかったのだが、性格的にわたしの辞書に「こまめに掃除」は、ない。それにここ1年は闘病中だった。

「埃（ほこり）で死んだものはいない」と何もかも片目をつぶって過ごしてきた。

ましてや今は再建手術後1カ月、化学療法終了後8カ月とあって、衰えた体力が回復していない。昔懐しウルトラマンの胸ランプのピコピコではないが、「元気」から「ちょっと疲れた」になると、そこから「もう駄目」までが猛烈速い。ある程度疲れてしまうと「気力でもうひと踏ん張り」はありえない。「気力で体力をカバーする」というのは基礎体力のあるひとの話で、基礎体力がなければ気力で補いようはない。

それにいつものことだが、寸前までバカみたいに忙しかった。いや、このことばには語弊がある。事實は、寸前までしっかり遊ぶのにバカみたい忙しかった、だ。最後のスキーに行った。最後のコンサートにも、ノルウェー人が呼んでくれたクリスマスパーティにも行った。つまりは、わたしのなかでイタリア暮らしを楽しむ、ということに比べたら家の清掃というものの優先順位が格段に低かった、ということだろう。このツケは、日本に帰ってからしっかり払うことになった。

家のかたづけにまるで熱が入らなかったのには、もうひとつ大きな理由がある。

わたしは日本に帰りたくなかったのだ。

帰っていく茨城がイヤというのではない。好きで買った土地に好きで建てた家である。田舎で空は広く青く、人情に大雑把（おおざっぱ）なところはあ

がその分気さくで、新興住宅地でのつきあいもわりと風通しがよく、楽だった。

そんなことより、イタリアで見たり聞いたりした数々の美しいもの、苦勞して得たイタリア語、あけっぴろげでひとなつっこく陽気なイタリア人、各国の友人。それをみんな失うのが辛い。今のわたしの生活の、半分以上ではないか？

それに日本は確かにわたしの母国だが、こっちで過ごした4年半のうちに苦勞しながら日本と違う考え方、暮らし方になじんで、わたしはずいぶん変わってしまった。わたし自身が半分日本人でなくなっていて、半分はイタリア人、あるいはヨーロッパ人的なところがある。

日本に帰れば、もう一度、日本のやり方に慣れるという苦勞をしなければいけない。日本では日本人が「みんな同じ」ことが当然とされる。「外国帰りの妙な日本人」ではなく、「純国産日本人」が要求される。それを満たすには、かなりの苦痛を伴う努力が必要なのだ。以前アメリカから帰ったときには、「ああ、やっとまた日本での暮らしになじんだ」と思えるまでに、ゆうに半年はかかった。それを繰り返すであろう、というのは充分予測できる。

イギリス人のパムも言っていた。

「イギリスの故郷に帰っても、そこを離れたことのない近所のひとたちはずっと同じ。でもわたしだけは、外見はともかく内側がまるで違う。でもまわりのひとたちにそれは見えないで、前のわたしと同じだと考え、自分たちと同じことを要求する。だから帰ったら違和感と疎外感のかたまりよ」

日本の商社員の奥さんなどは、もっとすごいことを言う。

「社宅住まいだと、あら、イタリアにいたの、いいわねえ、どんなだったの？って聞かれたりするけど、『ロチャック』に限るわよね。下手にイタリアのことをしゃべり散らそうものなら、いつも自慢話ばかりしてるとか、自分だけ違うと思って、とか陰口をきかれて、村八分にされるのがオチよ。ええ、まあね、なんてごまかして、イタリアのことは何にも言わないでいるのが一番！」

わたしの場合は社宅ではなし、そこまではいかないだろうと思ったが、憂うつなのに変わりはない。

しかし、どうしようもない。

何にでもいつかは終わりが来る。

アカシア

また逢えるよ  
と わたしの眼をじっと見ながら  
あなたが言う

南へ渡る燕が  
海を越え  
この軒にまた巣をかけるように

六月になれば  
道に沿ったアカシアが  
また甘い香りでわたしを抱きすくめるように

この小川の水のこの一粒が  
海へ流れ  
空へ昇り  
雨となってまたここへ戻ってくるように

それとも  
この花壇中の白ばらが  
悉（ことごと）く黄のばらに変わる  
その日に

また

逢えるよ……

引っ越し屋さんが来るまで残り1週間、家中のカーテンと、最後のスキーに行ったあとのスキー服6人分を洗ってしまおう、というときになって、洗濯機が動かなくなった。3千円の出張費を払って修理屋さんに来てもらおうと、修理には最低3日、3万円かかると言う。洗濯機はわたしのものではない。大家に電話をかけて修理費を出すか、と尋ねてみると、意外なことに洗濯機は大家のものではない、と言う。前の借家人の誰かが置いていったのだ。つまり、大家から修理費は出ない。

まさか今さら新品の洗濯機は買うわけではない。よりによってこんなときに、と目の前が真っ暗になった。毎日膨大な量の洗濯物を、洗剤つきで友人の家に持って行って洗濯してくれと頼む。が、続けて同じ家に持っていくのは悪くてできない。1日分が洗濯機3回分である。友人の多いのを幸いと思おう、と自分に言い聞かせながら、友人の顔を代わるがわる思い浮かべ、あちこちの家に電話をかけて朝と晩に通った。

とうとう引っ越しの日が来て、3日かけて家中の家具と持ち物を梱包していった。そのすべてに引っ越し業者と共同で番号をつけ、日本の家の「1階食堂」「2階子ども部屋」などの行き先と、「食器」「本」「おもちゃ」などの中身をマジックで書く。一方で全部のリストをつくり、大ざっぱな保険金額を計算する。貴重品は別である。

日本に航空便の荷物が着くのは3週間後、船便は2カ月後。コンテナがイタリアの空港や港へ行き、税関を通り、飛行機や船に積み込まれて運ばれ、日本に着いてまた税関を通過してトラックで運ばれるとなると、長い時間がかかる。同じ時期にイタリアからスウェーデンに帰る友人が、家に家具が着くまでに陸路で1週間かかると嘆いていたから、「1週間なんてまだ短いわよ、あなた、同じヨーロッパじゃないの」と慰めた覚えがある。ちょうど同じ日に、イタリア

に引っ越してきたばかりで不安がるフランス人とも出会って話をした。1日のうちに去るひとと来たひとと話をすると、いかにも海外駐在員の多いアレーゼらしかった。

ふとんが運び出された時点で、一家6人が近所のホテルに移った。引っ越し業者が出入りする中に貴重品を置いておくのは物騒だからとホテルに置いていたら、宝石類がいくつなくなってしまうていた。わたしはそんなに高いものは持っていないのだが、母がタイの山奥で安く買った、ダイヤつきの大きなルビーのペンダント、夫がアメリカで買ってくれたきれいな緑色のブラックオパール指輪、などという数少ない高価なものだけがアクセサリ入れの中から消えていたのは、ホテルで掃除のひとか誰かがかばんの中を探したとしか思えない。わたしは整理が悪いので、ひょっとして荷物に梱包されているかとあとになって日本で念入りに探したのだが、出てはこなかった。フロントに預けておかなかったわたしのミスである。とはいえ、フロントがそんなに信頼が置けるわけでもない、という感じがあったのだった。

ホテルから、残る荷造りと掃除をしに家まで通う。まあこれでもか、これでもか、というほどゴミが出る。今までかたづけをしていなかった報（むく）いである。そしてあっちもこっちもシミやらカビやら汚れやらすごい。

ここへ来て夫が東京へ3日ほど出張した。何も帰国直前のこの時期に、と思うが、夫の会社は「食われる」ことが決まっていた。大企業の常で、会社はこの10年のあいだに4回合併吸収を繰り返して2回名前を変え、本社もアメリカ国内で何回か移動している。その吸収されるための準備として、海外駐在員はすべて、この時期に日本支社まで呼び戻されたようだった。

わたしに体力がないときに夫がいないのはこたえる。子どもたちを叱り飛ばして働かせても、なかなか能率はあがらない。半端に残る食べ物をもらってくる友人が来て、あきれて掃除を手伝ってくれる。

とうとう掃除もかたづけも終わらなかった。

夫はしょうがない、いいよ、と宣言し、2002年12月28日、わたしたちは6個のスーツケースと手荷物を持ち、汚い家をあとに、空港へと向かった。

飛行場にはイギリス人のアンを妻に持つドイツ人のフランクがたまたま父親を迎えに来ていて、わたしたちは最後の友人に別れを告げた。パトリツィアに言わせれば「マドカの人生のひとつの章」であったイタリア暮らしは、こうして淡々と終わったのだった。